

福井県の低地ブナ林 2 新羅神社—最低標高 200 m—

*大久保 嘉雄

ブナは冷温帯に生育する夏緑樹林の代表的な構成種で、純林をつくる。福井県の登山道を歩けば、標高 500 m 以上からブナ林を見ることができる。昔はもっと低標高から見られただろうが、人間による植林や薪炭採取のために二次林に置き換わったと考えられる。前報では福井県の低標高に局所的に存在する低地ブナ林の概略を述べたが (大久保 2020)、今回から一つずつ低地ブナ林を紹介する。

まず、福井県で最低標高のブナ林を紹介する。標高 200 m に位置する南越前町今庄の新羅神社ブナ林である (図 1)。新羅神社の南約 100 m にあり、2000 m² に 20 本のブナが生育する。小面積だが樹高約 20 m で胸高直径が 80 cm を越える木が 6 本あり、山地帯のブナ林の雰囲気を味わうことができる。

新羅神社は J R 北陸本線今庄駅から南西へ徒歩約 5 分のところにある。朝鮮半島にあった新羅と関係があるらしいが、「しらぎ」でなく「しんら」と読む。神社の前には 5 台ほどの駐車スペースがある。本殿の左手にある藤倉山への登山道を登る。斜面にはカタクリが群生し 4 月上旬から中旬には見事な花を見せてくれていたが、近頃は見られなくなった。ニホンジカによる被害を受け、4 年前には壊滅的な状態になったそうである。登山道を 5 分ほど登ると、道の左手に 2 本のブナが出迎えてくれる。2 本目のブナは見事な大木である。そこからすぐ左手の北斜面 40 m × 50 m に 15 本、右手下方の谷に 3 本と合計 20 本のブナが生えている (図 2)。斜面の上部はコナラ二次林、下部はスギ植林に囲まれている。さらに斜面の下には民家があり、土砂崩れしないようにブナ林を残したのだろう。しかし、自然林と呼ぶには亜高木層や低木層が貧弱であり、下刈りが行われたようすがある。

図 3 は前報でも示したが、福井県嶺北地方における 17 地点の森林の標高と暖かさの指数の関係である (大久保 2020)。△は照葉樹林、●は低地ブナ林、○はブナ林である。暖かさの指数とは、植物の生育下限温度を 5℃ と仮定し、5℃ 以上の各月の平均気温から 5℃ を引いた値の総計である。冷温帯のブナ林 (○) の暖かさの指数は 45 ~ 85 といわれる (吉良・四手井 1986)。低地ブナ林 (●) 4 地点は 88 ~ 99 と、少し高い値となっている。最低値の 88.1 は最低標高 200 m の新羅神社ブナ林で



図 1 南越前町今庄の新羅神社のブナ林の位置
国土地理院 2.5 万分の 1 の地形図を利用した

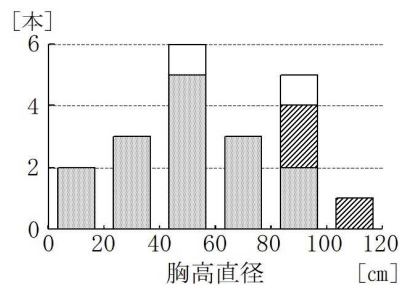


図 2 ブナの胸高直径の度数分布図
■ 林 (15本) ▨ 谷 (3本) □ 道 (2本)

* 福井県あわら市花乃杜一丁目 15-22

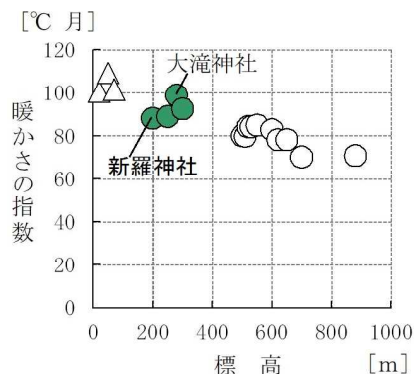


図3 標高と暖かさの指数の関係
△照葉樹林 ●低地ブナ林 ○ブナ林

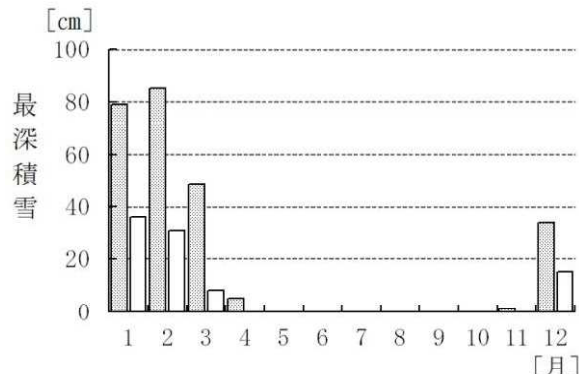


図4 低地ブナ林近くのアメダス観測地点の最深積雪
■今立(標高180m) □武生(標高100m)

あり、最高値の98.8は標高280mの大滝神社ブナ林である。大滝神社ブナ林の値は、冷温帯の夏緑樹林にも関わらず、暖温帯の照葉樹林(△)に匹敵するほど大きい。

原(1995)は、中部地方日本海側のブナ林が標高200mまでおりてきているのは、積雪や春先の湿度(空中、土中)の影響があると指摘している。標高200mの新羅神社は丹南地方を流れる日野川上流の山深いところにあり、まさに指摘通りの環境である。一方、暖かさの指数が最高値の大滝神社ブナ林は日野川中流の越前市の山際にあり、積雪も新羅神社ほど深くない。図4に、気象庁のアメダスの観測地点である今庄と武生の最深積雪の月変化を示した。今庄は新羅神社の南200m(標高128m)とすぐそばにあり、武生は大滝神社ブナ林(標高280m)の西8kmにあり標高32mである。今庄の3月の最深積雪は49cmあり、武生(8cm)より雪深いことが分かる。2021年2月12日に新羅神社と大滝神社のブナ林を訪れたが、標高200mしかない新羅神社ブナ林には35~50cmの積雪があり、標高280mの大滝神社ブナ林には積雪がなかった(次頁の写真)。

また、2005年の豊作年の種子から育った幼樹が、新羅神社ブナ林の林床には数多く残存している(次頁の写真)。一方、大滝神社ブナ林の林床では1本も見られない。これは雪解けが早く林床が乾燥しやすいために、発芽や実生の成長に悪影響を及ぼしていると考えられる。このことから、標高が低くても、積雪が多く雪解けの遅い新羅神社の方がブナの生育に適していることがうかがえる。

新羅神社の低地ブナ林は最低標高(200m)であるが、幼樹の残っているブナ林である。積雪や低温が今後のブナ林の成立を保証していると推測される。このまま下刈りなどの手を入れなければ、幼樹が淘汰されながら低木へと成長していくと期待される。JRや自家用車で簡単に訪れ山地帯のブナ林にふれ合えるところとして、次の世代に引き継がなければならない貴重な林である。

参考

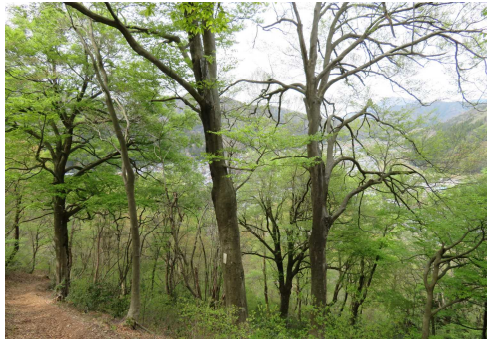
原正利. 1996. 日本のブナとブナ林. 「ブナ林の自然誌」(原正利編): 38-54. 平凡社, 東京.
 吉良龍夫・四手井綱秀・沼田真・依田恭二. 1976. 日本の植生—世界の植生配置の中での位置づけ. 科学 46(4): 235-247.
 大久保嘉雄. 2020. 福井県の低地ブナ林1 ブナ林の下限は標高何mか. 福井陸水生物会報(27): 22-24.



J R今庄駅と新羅神社ブナ林 2020. 4. 18



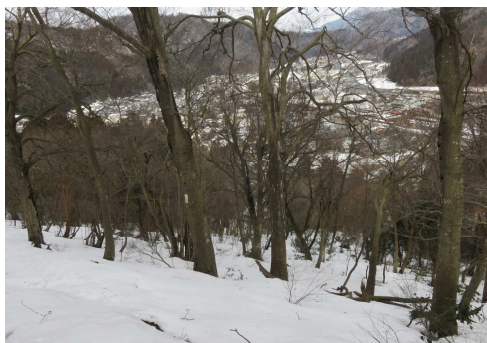
新羅神社とカタクリ 2020. 4. 18



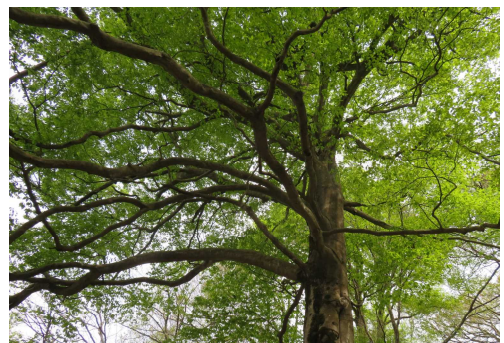
新羅神社ブナ林 (標高 200 m) 2020. 4. 18



2005年豊作年の種子から芽生えた幼樹. 2020. 4. 11



新羅神社ブナ林(左;標高 200 m)は大滝神社(右;280 m)と比べて雪深い。両方とも 2021. 2. 12 撮影



ブナはシュート(新梢)の展開が速い。一週間で一気に枝を伸ばし開葉する。左 2020. 4. 11、右 4. 18